新劇界のスーパースター
草野大悟のこと　（その１）

玉龍高校八回卒

西山 和宏

2014年秋、叙勲受章者として、樹木希林（きぎきりん）に旭日小綬章を授与との報道があった。

草野も存命なら、いつの日にか、叙勲の栄に浴することがあったであろうと、ふと思った。

1965年２月末、雨が降る寒い日、新宿・紀伊国屋書店の入り口左側のタイル壁に貼られた「怒りをこめて振り返れ」のポスターに「草野大悟」とあった。「アレー、草野は本当に役者になったのか」と思った。

玉龍の運動会で、ドーランを塗ってピエロに扮装し太鼓を抱えて応援していた姿を思い出した。また、大悟は大龍小学校のころ、「くさの　でこん（草野 大根（でこん））」と、からかわれていたことを思い出し、「大根役者」になったんだと。

紀伊国屋ホール

「ぶどうの会」に入るというような話をおぼろげながら聞いていた。それが文学座の舞台に立つとはすごいなぁと、早速、中間一範を誘って、紀伊国屋ホールで観劇とあいなった。余談だが、料理が上手な中間一範には、彼が中野のアパートに住んでいたころ、絶品の鶏の水炊きを振る舞われたことがあった。

「ぶどうの会」は、1947年結成、木下順二原作で、山本安英（やすえ）が演ずる戯曲「夕鶴」で知られるが、1964年に解散した。

草野は、1961 年、文学座研究所に入り、翌年、準座員として文学座に入団、1966 年、座員に昇格。その間いくつもの舞台に立っていた。

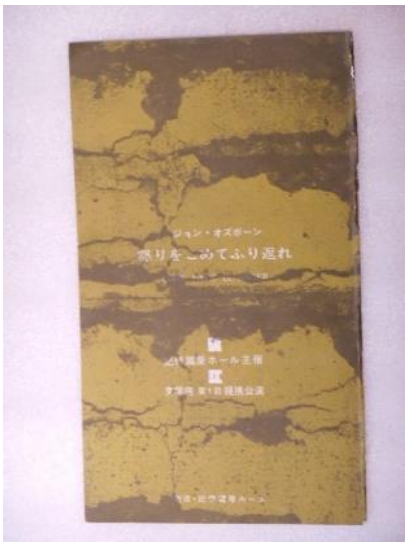
1965 年 2 月、中間一範と一緒に観た「怒りをこめて振り返れ」は、草野が準座員時代のものであった。共演者は岸田森（きしだしん）、小川真由美、川口知子（ともこ）など。文学座研究所の同期生には、これらのほかに樹木希林、寺田農、橋爪功、北村総一朗などがいた。

芝居が終わって、楽屋に草野を訪ねると「オー、オー」と久方ぶりの再会になった。

楽屋には草野の妻で女優の田島和子を紹介された。彼女はプロレタリア作家佐多稲子の姪だと説明を受けた。共演者の岸田森と悠木千帆（樹木希林）の夫妻もいた。樹木希林の叙勲報道で 71 歳とあるのを見て、あのとき、草野よりも名が知られ、見た目も年嵩で、まさか年下とは思わなかった。当時 22 歳だが立派なおばさん顔、私は 25 歳。悠木千帆は、その前年

の 1964 年には森繁久弥のテレビドラマ「7人の孫」にレギュラー出演していた。

岸田森（当時 25 歳）は凄味のあるいい役者であったが深酒がたたって早世した（43 歳没）。生年は草野と同じ 1939 年。「教え好き」といわれた岸田森は草野にとって、鹿児島訛りを直し標準語を教えた先生であった。



「怒りをこめて振り返れ」は、稼ぎの少ない亭主と裕福な家庭に育った妻との罵り合いが繰り返されるような筋書きであった。この芝居は新劇の役者を志す者ならだれでも出演を熱望しているものだと、草野から後で聞かされた。

そのような芝居で主役とは凄いなと思っていたら、いつのときだったか、問わず語りで、文学座の大ボス杉村春子の初恋の人に似ているせいで、可愛がられたと、草野は言った。杉村春子は、広島市の花街で遊女の私生児として生まれ、幼少時に母を亡くしたが、裕福な材木商の養女として育てられた。

草野が文学座研究所に入所したのは 1961 年。1963 年 1 月、杉村の専横的な運営に反発して、芥川比呂志、岸田今日子、仲谷昇、神山繁、加藤治子（はるこ）、小池朝雄ら中堅役者の多くが文学座を集団脱退して劇団雲を結成した。

同年 12 月、杉村は主演の戯曲を何本も書いていた三島由紀夫と不仲になり、三島をはじめ丹阿弥谷津子、中村伸郎、賀原（かはら）夏子など文学座の古参劇団員が次々と離れていった。そのような状況も草野に大きなチャンスをもたらしたというような話も聞いた。

草野とは中間一範も一緒に深夜または明け方まで飲み歩いた。主に新宿

であったが、ＪＲ新宿駅から歩くとコマ劇場角の交番の前を右へ曲がり、区役所通りまでの間の迷路を抜けて看板のない小さな店でセンマイなどモツの焼き肉で飲んだこともあった。そのような店の多くは、草野の行きつけで、彼のファンの店でもあった。そんなとき、劇団のことや俳優論などを真剣に語り、酔っぱらうというようなことは、あまりなかった。

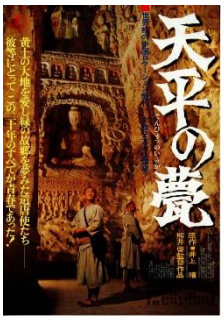
ある夜、雀荘を覗いてみようと誘われた。そこも草野の顔馴染みの場所で知り合い（ファン）がいた。そのファンは着流しであった。遊びで賭けないでやりましょうと、草野も一緒に雀卓を囲むと、「積み込み」で満貫連発、相手の手の読みもズバリ、プロの技を見せられた。

このような人たちもファンで、若山富三郎に可愛がられていたために、草野は深夜の新宿を徘徊・遊弋できたのであろう。

中国で映画「天平（てんぴょう）の甍（いらか）」を撮影したときのことを書いた草野の著書「同志（トンジー）! 僕に冷たいビールをくれ」の出版を祝う会が、1980 年４月、新宿で行われた。「天平の甍」は、高僧を日本に招くために中国に派遣された留学僧たちの物語。

草野大悟の出版を祝う会
勝新太郎を囲んで北見俊夫先生も一緒

出版を祝う会の司会は岸田森と吉田日出子が務め、（「天平の甍」共演の）浜田光男や鶴田忍に加えて、多数の演劇・映画人が出席し、勝新太郎は「愛の賛歌」を歌って盛り上げてくれた。



「天平の甍」の著者井上靖から「作家は 60 歳、役者は 40 歳が中締め....」と 40 歳の草野に躍進を期待する祝辞が読み上げられた。

この日の朝、私はフィンランドのヘルシンキのホテルで目を覚まし、フランクフルト、モスクワ経由で帰国して出席した。上空から見た朝焼けに染まった氷原のシベリアが美しかった。この年の３月、退社して独立独歩を歩きだした。

勝新太郎よりも若山富三郎のほうが、草野を可愛がり引き立てていたと思う。大阪から東京への帰途、若山富三郎のアメ車（リンカーン）に同乗させられ、運転手に「飛ばせ、飛ばせ」とけしかけぶっ飛ばしたと、面白おかしく草野は話した。

若山富三郎は勝新太郎の兄で、その兄弟仲は非常によく、共通点は「借金が得意」「親分肌で取り巻きを大勢連れ回したがる」だそうだ。山城新伍や菅原文太も若山富三郎に可愛がられた。岸田森も可愛がられた１人であった。岸田は、1980 年（昭和 55 年）ころ、「エスビー食品：ゴールデン・レインボーカレー」のテレビＣＭで水谷豊の演出をした。

若山富三郎は、1964 年 10 月から約半年、東京 12 チャンネル系列放映、池波正太郎原作の小説「人斬り半次郎」をもとにした「風雲児半次郎」に主演した。富三郎の殺陣は当代随一と言われていた。

中村半次郎（桐野利秋）を主役に幕末から西南の役まで描いた小説「人斬り半次郎」は、上下２段組で 574 頁という大作である。池波正太郎が、芝居の脚本と演出をしていた昭和 33 年ころ、新国劇辰巳柳太郎の依頼で

「賦将～桐野利秋」を書いた。1959 年（昭和 34 年）４月、明治座で初演された。

「怒りを込めて・・・」楽屋訪問の後、演出家やスタッフ十数名と一緒に、新宿三丁目の都電車庫裏、怪しげな雰囲気の一角にある例のピヨピヨのママのバーへ行った。狭い店内でどうするかと見ていると、スタッフの中には、そこでアルバイトをしている者もいてカウンターの中に入って給仕をした。

草野も結構「取り巻きを大勢連れ回したがるほう」であったが、懐がさびしい若手にはそのような面倒見が必要であったのだろう。名の通った俳優でも稼ぎが少なさそうなときには、呼び出して飲みながら相談に乗ることがあった。

「怒りを込めて・・・」の翌 1966 年、やはり紀伊国屋ホールで「犀（さい）」という、ある小さな町で住民が次々「犀」になるという芝居を中間一範と一緒に観た。客席には「怒りを込めて....」で共演したスターのオーラに包まれた小川真由美その他の新劇人がいた。

出演者では、劇中でピアノを弾く美人女優がいた。「犀」が駆け回るというシーンで転ぶことが多く、脚は紫色のあざだらけになっていた。その人の名は「塚原佳穂里」。小椋佳と黒門小学校（東京・台東区）で同級。大学３年のとき、女優を志して文学座に入り、彼に別れを告げた。彼は檜原湖近くの村の「小椋」という家で悶々の日々を送っていた。

ある日、スーツケースを持った女性がその家の前に立った。その彼女が「佳穂里」。その思い出をペンネーム「小椋 佳」とした。「佳」は「佳穂里」の「佳」。小椋佳の本名は神田紘爾。「佳穂里」は神田佳穂里になった。

小椋佳は、1975年、「シクラメンのかほり」（歌：布施明）で日本レコード大賞を受賞した。先日、あるテレビ番組で、あるタレント（武田鉄矢）が「シクラメンには香りはない」。あの歌のタイトルはおかしいといっていたが、「かほり」は「香り」ではなく、「佳穂里」。

小椋佳は、日本経済新聞の「私の履歴：平成28年１月１日付け」冒頭に「... 自分が唄いたいと思える言葉を日記から紡いで歌創りを始めた。その姿勢は基本的に今も変わっていない」とあった。

草野は、1966年、文学座で座員に昇格したが、翌1967年には退団し、前年に文学座を離れて「六月劇場」を結成していた岸田森・悠木千帆に合流。これを契機に、草野の映画・テレビの出演が急速に増えた。

1967年６月、「六月劇場」の創立公演という「魂へキックオフ」を新宿紀伊国屋ホールで、中間一範と一緒に観た。これは、岸田森が主演で、悠木千帆とともに草野も出演していた。話の筋は、若者数名がアパートの一室に集まって、亡くなった昔の仲間のことを語り合うものであった。

草野、中間一範、私の３人でよく飲み歩いた。あるとき、かなり遅い時間に新宿から、世田谷区千歳烏山の草野宅に誘われた。家には、妻の女優田島和子さんがいて、麦平ちゃんがよちよち歩きをしていた。

何かの拍子に北見俊夫先生の話が出た。深夜であったが、草野が先生に会いたいから行きたいといいだした。在宅の確認と訪問の承諾を得るために電話を入れ、千歳烏山から練馬区大泉学園の先生宅へタクシーで押しかけた。

先生は「オー、オー」と歓迎してくださった。それ以前から、柳田國男賞を受賞された新聞報道を見て先生と連絡をとるようになっていた。草野の母は、先生の下宿を訪れ、本棚を物色して本をよく借りていたという。

北見先生は新潟県佐渡の出身で、佐渡へ調査に訪れた柳田國男を案内したことから、その民俗学研究所に関わりを持ち、そこを通して日本史教師として玉龍高校に招聘された。そのときの支度金、明確な金額は明かされなかったが家が買えるほど（頭金のことか）のものであったという。先生は漱石の「坊ちゃん」よろしく、桜島の温泉を楽しまれたそうだ。

余談ながら、柳田國男が死去した 1962 年 8 月 8 日のころ、私は、柳田の自宅近くの世田谷区成城学園の親戚宅に寄宿しており、連日、小田急線の車中で喪章を付けた弔問客を大勢見た。それらの中に、すでに東京にいた北見先生もいらしたことであろう。

東京から玉龍へ招聘された教師の中で東京の学校へ戻れたのは北見先生だけであったそうだ。先生は 1924 年生まれ、東京文理科大学（旧東京高等師範学校、後に東京教育大学）史学科卒。東京へは白鴎高校の教師として戻り、卒業生の就職活動をしているという先生に秋葉原の駅でバッタリ出会ったことがあった。

努力家の先生は、東京教育大学助教授、文学博士を取得なされたが、そのために大量の論文・資料の提出を求められたという。

東京・文京区から茨城県つくば市へ移転して筑波大学と校名を変更した東京教育大学では、助教授の「助」が取れて「教授」になった。その後、大東文化大学教授。73 年「日本海上交通史の研究」で柳田國男賞受賞。1995 年 3 月 23 日没（71 歳）。葬儀には玉龍八期生も多数参列。死後勲三等瑞宝章が追贈された。

深夜の先生宅訪問の後、北見会と称する集まりは、毎月のように、深夜から明け方まで行われた。あまり長時間のため、北見先生は中座されることが多かったが、よく出席してくださった。

北見会メンバーは、一組の稲森浩一、草野大悟、竹之内望彦、中間一範、村上（前田）久幸、満留紀弘、西山和宏、二組から柴田英紀、吉誠など。

熱狂的に野球を応援した果てにスズメを獲って焼鳥屋に売らざるをえない羽目になった稲森の話はいつ聞いても抱腹絶倒。竹之内と柴田の奥方は団地集会所に設置のテレビの前で甲子園出場の玉龍高校を応援している互いを見て、それぞれの夫が玉龍出身であることを知った。

村上は、100km 以上離れた宇都宮から、上京して北見会に出席する。1974 年 8 月 30 日、那須りんどう湖の場長の彼を訪ねた日に、三菱重工業爆破事件が起った。満留の独立の門出を祝う新宿で開催されたパーティには歌手が大勢出席して盛り上げた。吉は、東京・府中でガソリンスタンドをはじめいろいろな事業を起こし、日本料理店を開店したときには北見先生以下北見会一同はご馳走になったことがあった。

メンバーの多くは、今尚、元気で意気軒高、現役として、ビジネスや仕事を継続している。

北見会の面々

1990 年１月７日からＮＨＫ大河ドラマで司馬遼太郎原作の「翔(と)ぶが如く」が放映され、草野は海老原穆(ぼく)の役として、またナレーターでもあった。

初回放映分収録にあたって、セリフを「かごっま弁」か、「標準語」にするか、ＮＨＫで意見が分かれた。草野と共演の西田静志郎（役：篠原国幹、甲南高校卒、日本大学芸術学部演劇学科卒）は、「かごっま弁が、よかどー」と強く主張。その熱意に打たれたデイレクターが「よし、それなら、“かごっま弁”と“標準語”で試作品を２つ作りましょう」と賢明な判断をした。

２つの試作品を観比べて「しくじっても、ＮＨＫを首になるだけ」と、デイレクターが「かごっま弁」、実際には「唐芋(からいも)標準語」で制作することに決したと、草野から聞いた。

ところがいくら「唐芋標準語」にして分かりやすくしたといっても、言語能力が弱い非薩摩人には分かりにくい。そこで、第３回放映「運命の女たち」から字幕をつけることになった。日本語のドラマを字幕で観るのは厄介。それで、視聴率はどうなったか？

三遊亭歌之助（落語家、鹿児島県肝属郡出身）によると、「鹿児島では大変な評判で視聴率は空前の 80%、他の地域では 20%。両方を足せば視聴率 100%」。実際は、関東地区でも、平均視聴率 23.2%、最高視聴率 29.3%。

1991 年 2 月 24 日、TBS ラジオ「ラジオ図書館」収録中にクモ膜下出血で座り込み、緊急入院。2 月 27 日、急逝。行年 51 歳。

Sleep in Peace　合掌

追記：荼毘に付す幡ヶ谷の斎場で、彼のマネジャーから「草野は新劇界のスーパースターでした」と聞かされた。「アー、それで」と、草野の芝居の観劇には、顔を見知った新劇人が多かったことを納得した。

彼は理想とする演劇を追い求めていた。これは演劇人として当然のことかもしれないが、「演技しているように、それとも、演技していないように見せるべきか」など、演劇とは何かの話が多かった。資金を集めて映画を作りたいとも言っていた。

新劇界のスーパースターは、今日でも語り継がれるレジェンドとして生きている。

運動会の仮装行列。この中に草野もいます。あなたもいますか？